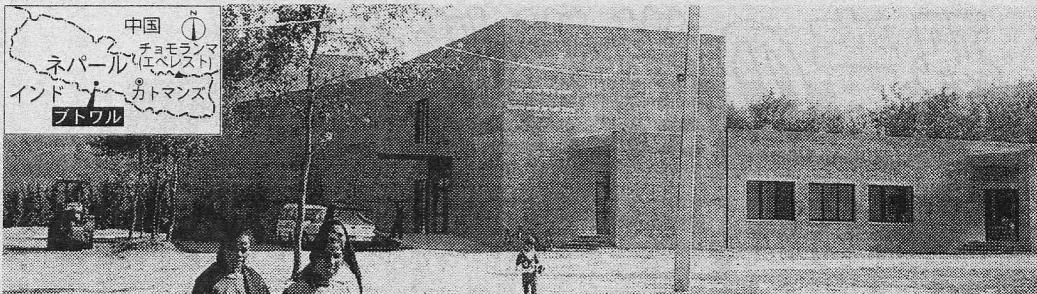


ネパール子ども病院



心 想

医師2人の構想から6年

善意の奇跡

ネパール南部のプトワル市郊外に今年2日、「ネパール子ども病院」がオープン。翌日から診療が始まった。毎日新聞、毎日新聞社会事業団とAMDA（アジア医師連絡協議会、本部・岡山市）が連携し、キャンペーンを展開して

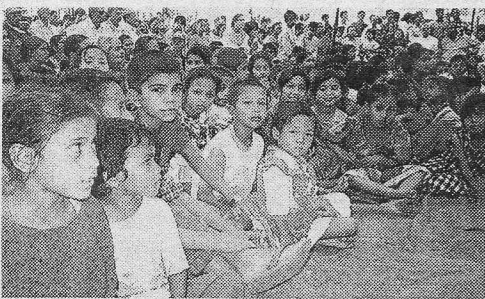
足掛け3年。アジアで最も貧しい国のひとつで、5歳未満の乳幼児の死亡率が日本の約20倍にもなるネパールにはこれまで、各国政府やNGO（非政府組織）の救援プロジェクトがさまざまな形であったが、今回の病院建設ほど多くの日本の市民が自ら参加した例はない。キャンペーンからプトワル市との折衝、日本からの援助システムの構築、診療開始に至る過程をつぶさに見続けた立場から、子ども病院の意味と意義を報告する。
【藤原 健、写真も】

「この病院の意味は実に大きい。在ネパールの日本大使館は、子ども病院をこう評した。それは、政府の手を借りず、すべてを民間の力でやり遂げたことに對する称賛とも受け取れた。病院づくりは、施設の建設・スタッフの確保・地元との協力態勢確立……などの点で他のプロジェクトの規模をはるかにしのぎ、民間レベルで計画するのは極めて困難とされてきた。確かに、今回、子ども病院の院長となったAMDAネパール（カトマンズ）のラメシウル・ポカレル医師と大阪市の故・篠原明医師（1996年死去）のたった2人で病院を構想した92年、日本ではバブル経済がはじけ、2人がつてを求めて企業回りを重ねても、賛同者は現れなかった。一夢物語に終わるのか……」

篠原医師が病に倒れ、阪神大震災が追い打ちをかけたこともあって、構想は夢の域を出なかった。しかし逆に、震災で約6400人ももの尊い命が失わ

バブルはじけ大震災も

病院の設計は、世界的な建築家、安藤忠雄さんが引いた。それが、毎日新聞と毎日新聞社会事業団が震災の翌年の96年、キャンペーン明日を生きたいーヒマラヤのふもとから」を始めたきっかけとなった。篠原医師はその年の11月、構想が具体化するのを待っていたかのように息を引き取ったが、生前、「多くの人たちが加わってくれ、あがりたい」と、私に何度も話した。



「ネパール子ども病院」の開所式にやって来た近所の子どもたち

夢救った「助け合い」

き受けた。寄金は1万人を超え、読者からのものも。企業からの参加もあった。大阪ガス小さな灯運動、松下電器産業労働組合……。東京からは渋谷ライオンスクラブの浄財もあった。被災地でも、AMDA兵庫（連利博代表）が今年2月に設立された。医師、看護婦、薬剤師などがメンバーとなってAMDA本部と連絡し合いながら、医療機材、医薬品の調達に奔走した。

岡山市では、AMDAの高校生組織が、病院の付属施設として構想されている障害児のための施設建設向けに、街頭募金活動を始め

広がる支援 すべて民間の力で結実

こうした日本の動きに連動、「世界の安藤」の名に魅せられた有能なネパールの建築家が多数参加したし、プトワル市と地元商工会議所も病院の周辺を整備し、水道や電気も引いた。人口約10万人。年間予算規模4500万ルピー（1ルピー約2円）の市財政は決して豊かではない。その後、管内の小学生在が1人当たり1ルピーを毎月積み立て、これを運営費に回すなどのアイデアで、「日本からの善意」に込めるようにしている。

病院のスタッフは今、ネパール人2人、日本人1人の医師と4人の看護婦、5人の検査技師。50床のベッドは真新しいが、医療機器の大半は、インド経由で陸路、運ばれている。機器が整備され、急患の手術ができるようになるまでには、もう少し時間がかかる。

病院運営は、AMDA本部AMDAネパールの連携で行うが、通信事情が悪く、カトマンズから現地へは、空路ハイワッドまで向かい、そこから車でさらに40分もかかる。機器に限らず、医薬品の運搬も不便だ。軌道に乗るまでは、病院スタッフの強靱な意志に頼るしかない。

現地の人たちは、この病院を「日本の病院」と呼んでいる。最先端の機器と技術、患者に優しい看護、清潔な施設……。そんな「日本」のイメージを壊さないためにも、これから病院への関心を持ち続けて下さい」と、曾根茂・AMDA代表は強調した。